建築装飾教育

東京大学 工部寮工学校 明治6 ｜造家学科 設立（明治6） 工部大学校 明治10 帝国大学工科大学 明治19

造形装飾 ジョサイア・コンドル 装飾法 辰野／コンドル

工芸発展のため画学科と彫刻科が設置された。イタリア人建築家のカペレッティが教員となり、「家屋装飾」を教えていた。彫刻科卒業生の半数以上が明治宮殿の造営に携わっている。

工部美術学校 明治9

早稲田大学 東京専門学校 明治15

造形装飾（コンドル）
コンドルは英建築家バージェスに師事し、明治10年に教授として着任する。ゴシックやイスラムなど多様な様式について教え、学生に

装飾法（辰野）
辰野が留学時バージェスより教わった「美術建築」（建築家と芸術家の共同により建築を作る）を教育に反映させた。

装飾画（松岡）
辰野の友人で工部美術学校卒の松岡による。1,2年次の自在画、装飾画を担当する。

建築装飾教育の傾向

■東京大学
コンドルから始まった現・東京大学の建築装飾教育は、辰野でさらに「美術建築」の実現に向かい、塚本から岸田に引き継がれるまで歴史主義における装飾教育を行っていた。大正ごろからセセッションなど新たな建築様式が流入していたにもかかわらず、塚本の教育が変わらなかった要因として、塚本の実務経験の欠如と東京大学の建築教育における構造の重視が考えられる。大正4年にカリキュラムが大幅に変更し、授業の一部が選択制となった。その結果構造と意匠・装飾で大きく分かれることとなったが、意匠・装飾の担当教員は変更しなかったために、美術建築を理想とした歴史主義的装飾教育が残り続けたと考えられる。

■早稲田大学
早稲田大学での建築教育は明治31年以降と比較的遅い時期であるが、佐藤功一をはじめとした新たな建築様式の展開を進めた建築家や建築論者が多く配置され歴史主義、合理主義とも異なる建築教育の基礎を持っていた。芸術的気質が強く、装飾教育も今和次郎によって形式的なものでなく建築表現の一つとして進められていたとみられる。昭和12年から「建築装飾法」の授業担当となった卒業生の今井兼次も、モダニズムに進みつつある建築の流れと全く異なる装飾表現を試みている。

■東京藝術大学
現・東京藝術大学での建築教育は元々図案教育の中に位置付けられていたため、建築装飾が主流であった。コース制が始まったことで全面的な建築教育が開始することとなったが、担当教員のほとんどが現・東京大学の卒業生であった。特に装飾に関わる授業は長期に渡り実務経験のない大澤が担当していたため、東京大学の塚本と同様に歴史主義が残り続けたとみられる。

■各校の傾向
各教育機関において、明治30年頃から大正初めごろにかけて建築科の設立や工業図案との統廃合が見られる。
これは明治30年ごろに起こった教育体制の整備拡大が影響していると考えられるが、**それと同時に主に現・東京大学建築科出身の日本人が教鞭を取ることができるようになったからともいえる。**つまりコンドルや辰野ら初期の建築教育は、その後の各教育機関に広まった建築教育に大きく影響していることがわかる。「美術建築」は少なくとも明治期の建築教育の要であったと考えられる。
いずれの学校においても、大正後期以降に新たに登用された建築装飾教育の担当者は、明治期の教育に見られる様式建築の模倣や従来の歴史主義的建築設計は行っていない。大正初期ごろの大きな変遷の中で、工芸的な装飾を必要とする様式建築からの脱却が日本の教育機関で起こっていることがわかる。建築教育全体の流れは、西洋近代の流れよりやや遅れるもののほぼ同時に変化をしていると言える。
一方で新たに設立された建築教育機関と比較すると、東京大学や東京藝術大学のように従来の体制のまま教育担当者が変更されなかった場合、建築装飾教育が大きく遅れることとなる。

明治5年　10年　15年　20年　25年　30年　35年　40年　大正元年　大正5年　10年　昭和元年　5年　10年　15年　20年

片山／辰野／曾禰　葛西　伊東

建築家の思想と実作

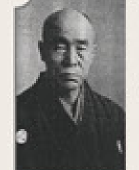
第一世代

片山 東熊（嘉永6－大正6）
- 長州藩士の元に生まれ、12歳ごろ奇兵隊として戊辰戦争に参加
- 明治12年 工部大学校造家学科第一期卒業
- 同19年宮内省に入省、内匠寮技師として主に皇室建築を設計
- 主な作品：帝国奈良博物館（明治27年）、帝国京都博物館（同28年）、東宮御所（同42年）、表慶館（同年）、竹田宮邸（同43年）

帝国京都博物館（現・京都国立博物館、明治28年）

辰野 金吾（嘉永7－大正8）
- 明治12年工部大学校造家学科一期卒業後、留学にて「美術建築」を学ぶ
- **同17年から35年まで帝国大学造家学科教授として教鞭を執る**
- **同36年に葛西萬治、同38年に片岡安と事務所を開く**
- 主な作品：日本銀行本店（明治29年）、日本生命九州支店（同42年）、盛岡銀行（同44年）、中央停車場（大正3年）、大阪市中央公会堂（同7年）

日本銀行本店（明治29年）
西洋各国の銀行建築を参考にし、堅牢に仕上げている。貴賓室には山水画の壁画装飾、唐草の風俗やマントルピースのライオン彫刻など威厳のある



曾禰 達蔵（嘉永5年－昭和12年）
- 明治12年 工部大学校造家学科第一期卒業
- 卒業設計にて折衷様式や新しい装飾を提案
- 工部省や海軍省を経て三菱に入社後、独立

中條 精一郎（慶応4年－昭和11年）
- 明治31年 帝国大学工科大学建築学科卒業
- 文部省建築技師を経てケンブリッジ大に留学
- **同41年曾禰とともに事務所を設立**

曾禰中條建築設計事務所
- 懐大寺明照、高松政雄、中村順平らの所員をもつ民間の建築設計事務所
- 主な作品：慶應義塾大学図書館（明治43年）、如水会館（大正8年）、小笠原伯爵邸（昭和2年）

小笠原伯爵邸（昭和2年）
小笠原長幹伯爵の本邸であり、懐大寺チーム所属の桜井松治が設計を担当している。全体はスパニッシュ様式であり、葡萄棚を図像化した鋳のアイアンワークや小川三知による鳥と雲を描いたステンドグラスが見られる。

第二世代

伊東 忠太（慶応3－昭和29）
- 明治25年帝国大学工科大学造家学科を卒業、大学院に進み日本建築史研究の発展に寄与する
- 3年間の大陸踏査旅行を実施し、様式や構造の連続性を説いた「建築進化論」を発表する
- 東京美術学校や東京帝国大学にて日本・東洋の建築史教育を担う
- 自身で生み出した「化け物」と呼ばれる空想生物や抽象化された動物を建築装飾として用いる
- 主な作品：真宗信徒生命保険会社（明治45）、明治神宮（大正9年）、築地本願寺（昭和9年）

真宗信徒生命保険会社（現・本願寺伝道院、明治44年）

第三世代

岡田 信一郎（明治16－昭和7）
- 明治39年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業、大学院に進学する
- 東京美術学校、早稲田大学教授として長く建築教育に携わる
- 警視庁や日本銀行の建築業務に嘱託として携わったのち、独立する
- 美術建築のほか、日本の芸術に用と美の一体を捉え建築の理想とした。
- 主な作品：大阪市中央公会堂（大正7年）、明治生命館（同9年）

鳩山一郎邸（現・鳩山会館、大正13年）
建主鳩山一郎の友人として設計を担当した。内部のステンドグラスは小川三知が担当しており、踊り場の法隆寺五重塔と鳩、第一客室窓には鶴が3羽描かれた西洋風庭園の図、第二客室欄間には花々と小鳥、食堂の欄間にはライチ、書斎窓にはキジ、玄関上部には19羽の鳩とイオニア式柱頭を持つ柱など、鳥や植物をモチーフとしたものが多い。

渡辺 節（明治17－昭和42）
- 明治41年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業、大学院に進学する
- 韓国政府度支部技師、鉄道院を経て大正5年に事務所を設立

渡辺建築事務所
- 所員に村野藤吾らを持ち、関東・関西で民間建築設計を担う
- 主な作品：大阪ビル本館（大正14年）、日本勧業銀行本店（昭和4年）、綿業会館（昭和6年）

大阪ビルヂング本館（現・ダイビル本館、大正14年）

結論

日本近代建築における装飾表現とは

建築装飾の設計は形式的、独創的に拘らず多くは建築家によるものである。建築家は建築主の意向に基づき、時にそれを超え、建築主や使用者のために必要だと考える装飾を設計する。芸術家の設計であっても、必ず建築家の計画が基礎となる。制作は近世以前より続く技術を培った職人や、教育を受け工芸や美術の心得をもつ技術者によるため、設計に忠実である。つまり近代建築における建築装飾とは、建築主や設計者すなわち社会の、建築に対する理想や願いを具現化したものである。

そしてその表現は西洋一辺倒でなく、むしろその時代に生き使用する人に馴染みのある、または真新しく映るように、建築の目的に合わせた独自のものが多い。当然装飾は空間の使い勝手や材料・構造など実用的な機能にならないものがほとんどである。しかしその装飾によって敬意や建築・空間の意味を示し、使用者の幸せや明るい未来を願い、空間の心地よさや楽しさを作るような、精神的な機能があったといえる。

日本近代建築は西洋の模倣と捉われがちであるが、それは建築手法のみである。建築装飾は、教育によって培われた建築家のポリシー、自身や社会の近世以前から根付いた思想・慣習や日本含む諸地域の建築史、文化的知識など拡大していく情報と体感を下敷に、「建築」として一つ一つ考えて作り上げられたものである。

終わりに